

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2496 号

Efficacy of Erector Spinae Plane Block after Trunk Surgery: A Stratified Randomized Observer-Blinded Comparative Study

体幹手術に対する脊柱起立筋膜面ブロックの効果：層別無作為化観察者盲検比較試験

久米村 正輝（くめむら まさてる）

博士（医学）

論文内容の要旨

体幹手術の術後鎮痛には硬膜外麻酔や末梢神経ブロックが日常的に行われているが、近年抗凝固療法の使用により禁忌となる症例が増加している。体幹手術後の術後鎮痛の代替法として、2016年に脊柱起立筋膜面ブロック（ESPB）が報告された。本研究では、腹部、乳房、脊椎の手術後の48時間全体の鎮痛効果を調べることを目的とした。

本研究は層別無作為化観察者盲検比較試験であり、2018年6月20日から2019年2月7日までの間に順天堂大学付属静岡病院で腹部手術、乳房手術、脊椎手術を受けた20歳以上の患者を対象とし、患者をESPBを受ける群（ESPB群）と受けない群（非ESPB群）に分けた。主要評価項目として手術後0、3、6、12、24、48時間後の数値評価スケール（NRS）スコアを記録し、術後48時間全体でのNRSを両群で比較した。副次評価項目として副作用の有無を記録した。

解析対象はESPB群51例、非ESPB群59例であった。術後48時間のNRSはESPB群の方が非ESPB群よりも有意に低かった。吐き気を訴えたのは各群1名であった。四肢のしびれやかゆみはいずれの患者にも認められなかった。

ESPBは体幹手術の術後48時間のNRSを有意に減少させた。ESPBは穿刺目標が骨であり、体表からの距離が短いため、従来の硬膜外麻酔や末梢神経ブロックと比較して、重篤な合併症の発生率を減少させる可能性がある。以上の結果から、ESPBは体幹手術後の術後鎮痛に有用であることが示唆された。